

県都千葉めぐりの旅

加藤隆雄

九月二十一日、参加者二十七名が中央公民館に集合。予定時刻八時に出発。天候は曇り。今回は本保先生に「多用中にもかかわらず、企画・案内役をお願いしての旅となりました。」

最初は若葉区桜木にある、国の特別史跡に指定された「加曾利貝塚」に到着。十年以上ガイドをされている方に案内され、北貝塚の「貝層断面観覧施設」「堅穴住居跡群観覧施設」、南貝塚「貝層断面観覧施設」の丁寧な説明と厚く積み重なった貝塚の断面と住居跡に驚愕しました。縄文人の食べた七十種類の貝や、動物の骨、植物の実など実物を拝見すると、当時、豊かで体に良い食生活をしていたものと想像します。

次は中央区亥鼻の「千葉城・千葉市立郷土博物館」に到着。学芸員の方に最上階へ案内され、千葉市内の主だった建物や、九十九里浜から千葉の港までの干鰯の運搬経路などの説明を受けました。館内では、千葉氏の勃興から滅亡までの約五百年間の歴史と一族がこぞつて妙見信仰していたことや、天守閣は小田原城を模した理由などの説明を受け、後日、再館願望を覚えました。

千葉城を後に、中央区千葉港の「千葉ポート

タワー」へ向かいました。高さ二五〇m。展望レストラン「シーガルキッチン」で、遠方の風景や千葉港の施設などを見ながら、昼食となりました。

食後は中央区千葉港中央埠頭の「千葉めぐり遊覧船」に乗り、食品コンビナート、成田空港へのジェット燃料輸送基地、JFEスチール東日本製鉄所などを見ながら約四〇分間、船に群がるカモ

メと一緒に海上を楽しみました。

下船後は、市役所駅前で「千葉都市モノレール」に乗り、車窓から千葉市内を見ながら終点千城台駅に到着。千城台駅でバスと合流して、徳川家康が鷹狩りのために



三日三晩で造成したという、御成街道を通り、最後の目的地、若葉区御殿町の「御茶屋御殿跡」前に到着。御成街道から鬱蒼とした林を百八十m行くと、東西百二十m x 南北二十三m、空堀と土塁に囲われた三千六百坪の整然とした御茶屋御殿跡がありました。当時の現況を留めている理由などの説明を本保先生からいただきました。

この行程は、縄文時代から現在までの約七千年間の千葉市の歴史を訪ねた貴重な旅となりましたことと、大好評であったことを、本保先生に心から感謝申し上げます。今後、この続きをお願いしたいと会員は願っています。

研修旅行「県都千葉めぐり」

望月 みさお

令和元年九月二十一日、今日の予報は雨。少し雨がパラつく寒い中、予定通り八時に出発しました。

東金道路に入ると両側の木々が中程で無残に折れているのが発見され、八日から九日にかけての台風十五号の凄まじさを思い起こしました。

最初の見学地は加曾利貝塚。縄文時代を代表する遺跡として国の特別史跡に指定されています。二グループに分かれボランティアの方に案内していただきました。知識の豊富な滑らかな語り口、クイズ有りの楽しいガイドに感動に近いものを感じました。貝塚の断面を両側に見て歩くのは地底探索のような面白さでした。貝塚の八割を占める地小さな小さなイボ

キサゴを出汁に使ったという説明に縄文人がとも身近な存在になりました。食べた動物の骨や角を加工して道具にしていたこと、二千年に及ぶ長い期間継続して集落が営まいたことなどから、想像していたよりずっと豊かな生活をしていただと思えました。時間の都合で一部しか廻れなかった為再度訪れてみたい場所です。

次は千葉城・郷土博物館。展望室は高台にあるため千葉市が一望でき気持ちのいい空間です。木彫りの常胤像の大きさ気迫に圧倒されました。

昼食はポトタワーでバイキング。風速六〇mに耐えられるとか。台風十五号は風速五七mドキツです。千葉港巡りの遊覧船は四十分の乗船です。投げた餌を海へ落ちる前に啜える素早いカモメの技に驚いたり感心したり。海から見える港の景色はどこかで見たような懐かしさがありました。帆船の優雅な姿も印象的でした。

最後に訪れた御茶屋御殿跡では、藤原様から遺跡平面図の説明を、御子息様と共にお茶とお菓子の心のこもったおもてなしを頂きました。また、私共の訪問に備えて台風で倒れた木々を片付けてくださったとのこと、本当に有難いことでした。

本保先生には、朝早くから夕方遅くまでのご案内をしていただき心から感謝いたします。藤原様宅で見た先生の「千葉市史跡めぐり」の録画を見る機会があれば嬉しく思います。

いつの間にか晴れていた天氣に「誰の行いが良かったのでしょうか。」といいながら終わった楽し

い研修旅行でした。

天皇陛下をお迎えして

故 永田 征子

平成十五年五月一八日、第五四回全国植樹祭の記念式典に、天皇、皇后両陛下がご来県されました。植樹祭式典終了後、両陛下は八街市にある特別養護老人ホーム「風の村」を訪問された。そして東金街道、九十九里有料道路を利用され午後六時、国民宿舎「サンライズ九十九里」へ到着されました。

九十九里町民はじめ、近隣の市町村からの駆け参じた方々の熱烈な歓迎(提灯行列)を受け、「ここに宿泊になりました。」

翌十九日は豊海小学校の生徒が引く観光地引きをご覧になった後、九十九里公民館に御越しになりました。折悪しく小雨の中、町内の小学生はじめ沢山の町民が出迎えました。

小休止の後、九十九里いわし博物館へ御出で下さいました。事前打ち合わせの場所、両陛下の御越しを、今か今かと心げきながら待ちました。両陛下は町長の先導で「いわしの水槽」を見学した後、自己紹介をすることになっていました。もう御出になる頃だと、ちよつと首を伸ばしたら、目の前に両陛下の姿がありました。これまで以上に緊張しました。

「ようこそ、九十九里いわし博物館へ御出で下さいまして」というご挨拶の音が、震えている自分がそこにありました。その緊張の一瞬は、皇后陛下の笑顔を見たら平常心に帰ってました。今でも信じ難い、すばらしい笑顔を押

顔しました。その美しさ優しさが、私を和ませてくれました。「驚嘆」の一語です。両陛下には、いわし生食コーナーからご案内しました。生食コーナーは天皇の方が詳しく皇后様に説明しておられました。

九十九里浜のいわし漁業史のコーナーでは皇太后様が干鰯について質問されたので、「鰯を天日乾燥した魚肥で、綿の木や藍の肥料として需要が多く、関西、四国方面へ出荷しました」と答えました。

皇太后様は木綿について関心を示され、「こちらでは今でも木綿を作りますか？」と質問されました。鰯の加工品コーナーでは「胡麻漬けは郷土料理の代表的な物です」と申し上げると、「今朝、サンライズで頂きました。おいしかったです。」とおっしゃいました。皇太后様はみりん干しを見て「懐かしいですね」と目を細めておいででした。

漁師の生活コーナーでは、皇太后様が「万祝」を見て「奇麗ですね。万祝の原料は何ですか？」と聞かれましたので「三河木綿が多かったそうです。」と答えました。

最後の古文書のコーナーでは、伊能忠敬の書簡に大変興味を示され、皇太后様は中腰になって伊能忠敬が長女「稲」に宛てた書簡を熱心に御覧になられていました。

館内にお二人の和やかな会話が聞かれ、説明に頷かれる両陛下。そして交互に質問し、関心の深さに感激致しました。でも十分な説明ではなかったと反省しています。いま思うと赤面の限りですが、宮内庁との打ち合わせ通り、二十分の約束時間を五分ほど超過しました

が、無事終えることが出来ました。いま振り返って、自分も臨時職員ながら、よくしたと自負しています。

両陛下の御来町の正式発表は一ヶ月前ということでしたが、三月から準備に入りました。いわし博物館は開館から二十一年、施設設備の老朽化が進んでいて、両陛下に満足してもらえない展示かと悩みました。色褪せた展示品の交換、新たな展示品、九十九里浜鰯漁業史の作成、古文書の展示換えその他、これまでの展示の不十分さをここで改めようと努力しました。

堂本知事の推奨で伊能忠敬直筆の書簡の展示もしました。千葉県の偉人の生誕の地をPRする必要も感じていました。中村家所蔵の古文書もお借りして展示し、稲、盛右衛門夫婦宛ての書簡文を両陛下に見て頂きました。

〈追記〉

天皇陛下は、学習院初等科時代の昭和二十三年一月九日、片貝海岸へおい出になつていますので、九十九里へは二度目のお越しになります。また学習院大学では、豊海地区粟生出身の平川喜啓氏(故人)が東宮御所に何度も招待されるほどの御学友でした。九十九里町は心のどこかに、懐かしさを覚えていたものがあつたと伺つておりますので申し添えます。

俳句誌「つくも」二〇八号より転載

日経上人のこと

妙覚寺 河野 時巧

「不惜身命」という言葉を聞いたことがあり

ますね。「法華経」の「譬喩品」に記載されています。「若人精進、常修慈心、不惜身命、乃可為説」という記述があり、書き下し文は「若し人精進して、常に慈心を修し、身命を惜まざらん、乃ち為に説くべし」となります。

意味は、「もし、ある人が仏道の修行に精進して、いつも慈悲の心を修め、身体や命も惜しまないのなら、このような人のために法華経を説きなさい」という意味です。「修行する人は、身体や命も惜しまずにいるべきだ」という考え方です。

今から四〇〇年前ごろわが宗頭本法華宗の先師に常楽院日経上人というお上人がいました。

まさしく、「不惜身命」の精神を身を以つて実践したお上人でした。

上人は永禄三年(一五六〇)に上総の国二宮村(現 茂原市二宮)生まれました。大沼田の檀林で日蓮聖人の御書や天台学を学びました。幼少時代から非常に雄弁家でありました。長じて奥州に布教のために参り、三〇〇人もの修行僧が居る浄土宗の学林(学校)で問答を仕掛け、二〇日間の論議し遂に論破し。その後、宇都宮では天台宗との問答に勝利しました。

慶長二年(一五九七)ごろ、土氣・東金等が七里法華の中心であるが、信仰は鈍っていました。三十八歳の日経上人は折伏の旗を作り両総の各地を布教し歩いていました。

お塚山(大網白里市南横川)に 方墳寺を建立し布教の拠点としました。慶長四年(一五九九)に総本山妙満寺の貫首として京都を中心に精力的に折伏布教をしました。家康から江戸

城において浄土宗との間で宗論を行うよう命じられ、慶長十三年(一六〇八)に日経上人は浄土宗僧侶と対論することになりました。しかし、この宗論は、純宗教的な立場からの論争ではなく、自宗の本意を主張するため、他宗に対して論争破折する折伏という一方法をとる法華宗を強制的に敗北させることにより一切の宗論を禁止して、幕政体制のなかにそれらを吸収してしまおうとする、家康の政治的な意図から設定されたものでありました。奉行衆から事前に宿所で手荒い暴力を加えられた日経は、当日、対論の場では一言も発することができませんでした。そのため、家康の逆鱗に触れ、翌慶長十四年、京都六条河原で、弟子五人とともに耳と鼻そぎの刑に処せられました。こうした厳しい迫害にも耐えた日経は、元和六年(一六二〇)十一月二十二日、三瀬(富山県婦中町)の鼻欠坂の雪の中鉄鉢を片手に六十一歳の生涯を閉じるまで、その後も北陸地方で弟子たちも両総で不受不施(不受不施とは受けず施さずということ、法華以外の他宗および不信者の布施供養を受けず、信者は謗法の僧に供養しないという、法華教団の信仰の清浄、純正を守るための宗規であり信条である。)の為、磔の刑で九名が殉教(寛永法難)、牢死、流刑(三宅島、大島、御蔵島等)に遇いながら強靱な精神力と篤い信仰心で「不惜身命」の布教活動を行い続けられました。

昨年、令和元年十月、日経上人四百遠忌を三瀬(富山県婦中町)の音川教会で盛大に厳修し、報恩感謝の祈りをささげてきました

ペタンクと言う競技に魅せられて

谷川 良枝

皆さんはペタンクと言う競技をご存知でしょうか。

パンフレットにはフランス生まれのおしゃれなスポーツと書かれて居りますがまだ日本での普及率はひくいようです。時期オリンピックのフランス大会では母国生まれのこのスポーツは競技種目に入るかも知れないと言われていました。中4メートル長さ15メートルのコートの途中でピュットと言う小さな球(ピンポン玉より1周り小さい)を目がけて三人対三人(トリプル)が鉄のボールを1人2球ずつ投げてピュットに近い玉の数によって得点されます。

ルールは少しカーリングに似ているように思いますが。このスポーツの始まりは二説聞いて居ります。ひとつはフランスのある青年が自分の弟に障害があつて……障害のある弟にも出来るスポーツはないものかと考えた事から始まつたと言う説、もうひとつは私はこのスポーツをするにあつてこの競技に必要な道具を調べてみましたら現在日本では通販は何軒かあるようですが販売店は大阪と都内で一軒あると言うので主人と娘と住所を捜して一式購入してきました。その店主が教えてくれたのはフランスの老人たちが仕事をしなくなると道路脇のベンチや公園のベンチでポケつと日なたぼっこをしている姿を見て、老人たちが楽しく出来て簡単なスポーツはないものかと考案したものがペタンクだと教えてくれました。前者は屋内でやるポッチャではないかと私は推察しましたが本

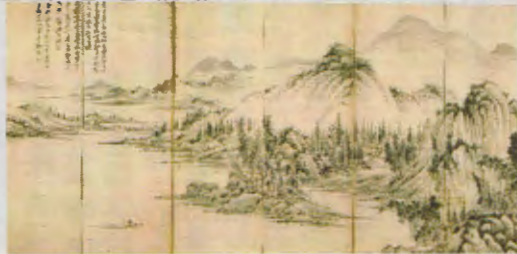
当のことはわかりません。鉄の玉は直径70.5mm、80mm、重さは650g、800gが公式試合では義務づけられて居ります。ペタンクは「誰でもどこでも出来る」生涯スポーツとしても又高度な技術を身につけて居るいろいろな大会に出る楽しみ方もあります。九十九里町では約10年前から一部の地域から始まつて、現在町スポーツ広場において月・木の午前中ルールを守つて楽しくやつて居ります。

現在、会員は16名ほどです。興味のある方は、是非一度見学にお出かけください。チームに分かれて真剣な眼差しでゲームをした後の休憩時間に水分を取りながら、皆さんと和気藹々と語り合うひとときがとても楽しいです。

九十九里浜の網主画家 齋藤 巻石

城西国際大学の水田美術館にて表記の特別展が開催されました。古山豊氏よりご案内をいただきうかがいました。

齋藤 巻石(けんせき)一七九七〜一八七四は四天木村(現 大網白里市四天木)の大地主であり、九十九里浜を代表する網主です。二代 齋藤四郎右衛門を継いだ巻石はいわしの地引網漁の繁栄で畜えた財力をもと、書画を収集し、海を見渡せる風光明媚な別邸「大洋庵」に文人墨客を迎



えて交わりました。巻石は自らも筆をとり、おもに伝統的な南画山水を手がけました。そして、自己の楽しみのために描いた作品は高く評価されております。会場内せましと展示された出品の中には「山水図屏風(東京国立博物館蔵)、涅槃図(要行寺蔵)、仁徳天皇望炊煙図(個人蔵)等々、百五十年以前の頃が生々と目前に表現され、その頃の郷土、江戸時代にいわし漁を中心として文化の花々が咲いていたと思えますと、感無量であります。

内山 記

月日	事務局日誌	講師など
7/20	上総九十九里浜来遊の文化人	齋藤 功氏
7/21	地区社協文学碑めぐり	内山会長
7/26	町誌資料集編集会議・以後8回	2年3月発刊
9/21	文学散歩、県都千葉めぐり	本保弘文氏
10/19	占領下の郷土	木島理八氏
11/11	サンライズ九十九里 文学碑めぐり	内山会長
11/16	将門よもやま話 山武地域の古墳について	村松英一氏 染谷佳子氏
12/21	古文書講座 遊女の恋文	川島秀臣氏
2年 1/17	新年交流会 サンライズ九十九里	
2/15	お話し会 語り・朗読・劇他 郷土研通信第11号発行	佐久間啓子氏 他

編集後記

令和の年になって二回目の『通信』がやっと発行することが出来ました。多くの方々からの投稿をありがとうございます。本年もよろしくお願ひします。